

令和3年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第7号（4月予報）

令和4年3月25日 秋田県病害虫防除所

【内容】 Ⅰ. 予報の要点 Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報 Ⅲ. 発生予報と防除対策 Ⅳ. 気象予報 Ⅴ. 気象データ Ⅵ. 用語の説明	【問合せ先】 秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251
【お知らせ】 ◇今回の予報対象期間は4月を主とします。次回の発表は令和4年4月26日の予定です。 ◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のウェブサイトでご覧いただけます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/ ◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬の情報については、秋田県のウェブサイトでご確認ください。 https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/ ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関にご相談ください。 最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」でご確認ください。 https://pesticide.maff.go.jp/ ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのウェブサイトでご登録いただけます。 http://www.e-komachi.jp/	

I. 予報の要点

水 稲	苗いもちの発生量は平年並と予想されます。育苗施設周辺や施設内に稲わら・もみ殻を置かず、種子消毒と育苗期のいもち防除を必ず実施してください。また、育苗施設内の通風不良、日照不足、長期の被覆、苗の過繁茂、田植の遅延は発病を助長するため、適切な育苗管理に努めてください。なお、県内の採種ほ産種子以外を使用する場合は、特に注意してください。
果 樹	りんごでは、腐らん病の発生量がやや多いと予想されます。樹体検診を実施し、発病部位は適正に処置してください。 なしでは、黒星病の感染量はやや少ないと予想されますが、前年に発生があった園地では開花直前にDMI剤を散布してください。 ぶどうでは、黒とう病の感染時期がやや早く、感染量は平年並と予想されます。前年に発生があった園地では発芽前に薬剤を散布してください。

Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生・感染時期	発生・感染量	
				現況	予報
水 稲	苗いもち	全県	—	—	平年並
	苗立枯病	全県	—	—	平年並
	ばか苗病	全県	—	—	少ない
	もみ枯細菌病	全県	—	—	平年並
	苗立枯細菌病	全県	—	—	平年並
	褐条病	全県	—	—	やや少ない
りんご	腐らん病	全県	—	平年並	やや多い
	モニリア病 (葉ぐされ)	県北部	やや早い	—	やや少ない
		県中央部・県南部	やや早い	—	やや少ない
	黒星病	県北部	やや早い	—	やや少ない
		県中央部・県南部	やや早い	—	やや少ない
	リンゴハダニ	全県	—	平年並	平年並
ハマキムシ類	全県	やや早い	—	平年並	
な し (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	平年並	—	やや少ない
	リンゴハダニ	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
ぶどう	黒とう病	県南部	やや早い	—	平年並

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稲

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 苗いもち (苗の葉いもちを含む)	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、前年の穂いもちの発生量は少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、自家採種せず、県内の採種ほ産種子等を使用する。

イ、育苗施設の周辺や施設内に稲わら・もみ殻を置かない。

ウ、種子消毒を行う。また、種子消毒の注意事項は、「3. ばか苗病」を参照する。

エ、育苗期いもち防除は、次のいずれかの方法で必ず実施し、育苗施設から本田への伝染・発病苗の持ち込みを防ぐ。

- ① 播種時～播種7日後頃に、ベンレート水和剤500倍液を箱当たり500mL又は1,000倍液を箱当たり1Lかん注する。

② 緑化始期に、ビームゾル500倍液を箱当たり500mLかん注する。

オ、エ①の播種時処理は、種子消毒に使用するタフブロック又はエコホープDJの防除効果を低下させるので体系処理は行わない。

カ、ビームゾルは使用時期が遅れたり、低温時に使用すると葉先が黄化する薬害を生じる。

キ、本田の葉いもちを対象として床土混和处理又は播種時（覆土前）処理を行う箱施用剤は、苗いもち（苗の葉いもちを含む）に対する防除効果がないため、育苗期いもち防除（エの殺菌剤）を必ず組み合わせる。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 苗立枯病 (ピシウム菌)	—	平年並（前年よりやや多い）
(リゾープス菌)	—	やや少ない（前年並）
	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ピシウム菌 /-、リゾープス菌 /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、育苗施設を清掃する。また、育苗箱などは十分洗浄し、「ケミクロンG」などで消毒する。

イ、人工培土を使用する。

ウ、育苗期間の温度管理と水管理を適正に行う。

エ、次の薬剤で防除を行う。

使用時期	農薬名	使用量又は希釈倍数	散布液量 (箱当たり)	ピシウム菌	フザリウム菌	リゾープス菌	トリコデルマ菌	リゾクトニア菌	白絹病菌
播種前	オラクル粉剤 ¹⁾	10～15g/箱	—	○					
	タチガレエースM粉剤	6～8g/箱	—	○	○				
	ナエファイン粉剤 ²⁾	6～8g/箱	—	○	○	○			
播種時	オラクル顆粒水和剤 ¹⁾	4,000倍	500mL	○					
		8,000倍	1 L						
	ダコニール1000	500～1,000倍	500mL			○			
	ダコレート水和剤	400～600倍	500mL		○	○	○		
	タチガレエースM液剤	1,000倍	500mL	○	○				
		2,000倍	1 L						
	ナエファインフロアブル ²⁾	1,000倍	500mL	○	○	○			
		2,000倍	1 L						
	ヘッド顆粒水和剤 ^{1), 3)}	500倍	500mL	○					
		1,000倍	1 L						
ベンレート水和剤	500倍	500mL					○		
	1,000倍	1 L							
ランマンフロアブル ¹⁾	1,000倍	500mL	○						
出芽後	タチガレエースM液剤	500倍	500mL	○	○				
		1,000倍							
	バリダシン液剤5	1,000倍						○	○
	ランマンフロアブル ^{1), 4)}	1,000倍		○					

1) オラクル剤、ヘッド顆粒水和剤、ランマンフロアブルは、1成分でピシウム菌による苗立枯病を防除できる。

2) ナエファイン剤は1成分でピシウム菌、フザリウム菌及びリゾープス菌による苗立枯病を防除できる。

3) イネミズゾウムシ、イネドロオイムシとの同時防除が可能である。

4) 使用時期は緑化始期までとする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ばか苗病	—	少ない (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/-)。

イ、前年の本田での発生量はやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、自家採種せず、県内の採種は産種子等を使用する。

イ、種子予措をする予定の作業施設やその周辺を清掃し、伝染源となる稲わら、籾殻、米ぬか、粉じん等を除去する。

ウ、種子消毒を行う。種子消毒の防除効果は、浸種水温10～15℃で高いことから、水温10℃以上が確保できる4月上旬頃を目安に浸種を開始する。

エ、高濃度短時間浸漬及び低濃度長時間浸漬では、消毒効果の安定・向上を図るため、浸種開始後2日間は水のかけ流し、循環や交換をしない。

オ、塗沫法及び湿粉衣法による消毒種子又は、消毒剤吹き付け・塗沫済み種子では、種子表面に付着した薬剤が浸種後に水に溶け出し、種子周囲の薬剤濃度が高くなった状態で消毒効果を発揮する。そのため、浸種開始後2日間は種子袋をゆすったり、水のかけ流し、循環や交換をしない。

カ、複数の品種や来歴、防除方法の異なる種子を同じ容器で同時に浸種・催芽をしない。また、品種や防除方法が変わるごとに容器を十分に洗浄する。

キ、消毒前の種子と消毒後の種子を同じパレットやシート等に置かない。消毒後の種子を載せるパレットやシート等は十分に洗浄した清潔なものを使用する。

ク、周辺からの病原菌の侵入を防ぐため、浸種・催芽時は容器に蓋をする。

ケ、浸種時の水量は、種子1kgに対し水約3.5Lとし、水温は10～15℃になるように努める。水温が低い場合はお湯で調整する。浸種は水道水、井戸水を用いて水槽で行い、河川や湖沼の水は使用しない。

コ、浸種期間は浸種水温10℃で6～8日、14℃で6日程度とし、安定した薬効を確保するために、水交換は2～3回とする。

サ、催芽は30～32℃で行う。

シ、循環式催芽器を使用した催芽は、発病が多くなる場合がある。

ス、出芽までの温度が低いと発病が多くなりやすいので、被覆資材等による保温に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. もみ枯細菌病	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、前年の発生量はやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、育苗施設を清掃する。また、育苗箱などは十分洗浄し、「ケミクロンG」などで消毒する。

イ、循環式催芽器を使用した催芽は、発病が多くなる場合がある。

ウ、所定の播種量を守り、厚播きはしない。

エ、出芽温度は32℃を超えないようにし、被覆期間を過剰に長くしない。また、出芽後の再被覆は行わない。

- オ、緑化期以降はハウスの開閉をこまめに行い、25℃以上にならないようにする。また、通風を良くし、過湿にしない。
- カ、過湿にならないよう、かん水は午前中に行う。
- キ、種子消毒は細菌病に効果のある薬剤を使用し、「3. ばか苗病」の防除上注意すべき事項を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 苗立枯細菌病	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
- イ、前年の発生量はやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、「4. もみ枯細菌病」を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. 褐条病	—	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア、近年の発生量はやや少なく推移している (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、循環式催芽器を使用した催芽は、発病が多くなる場合がある。
- イ、出芽温度は30℃を超えないようにする。
- ウ、緑化期以降は通風を良くし高温、過湿にならないようにする。
- エ、種子消毒は細菌病に効果のある薬剤を使用し、「3. ばか苗病」の防除上注意すべき事項を参照する。

B りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 腐らん病	—	やや多い (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア、3月1～2半旬の巡回調査における発病樹率は0.9% (平年1.5%) でやや低く、発病地点率は18.2% (平年19.2%) で平年並だった (/±)。
- イ、豪雪の影響により、各地域の園地内で枝の折損が見られている (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、雪害を受けた部位は早めに整形し、伐採した枝は園内に放置せず焼却する。
- イ、樹体検診を実施し、早期発見と適正な処置に努める。
- ウ、泥巻きは、病患部を削り取り、水を加えて団子状にした草つき土で覆い、ビニール等を巻く。
1年後には取り除いて治癒状況を確認し、治癒していない場合には再度行う。
- エ、雪害の整形部及び剪定後の切口にはトップジンMペースト又はバッチレートを塗布する。

オ、枝腐らんを剪去した後の切口及び病斑の削り取り後（健全部を含め紡すい状に大きく削る）にはトップジンMペースト又はバッチレートを塗布する。なお、剪去した枝、削り屑は放置せず焼却するか園外に搬出する。

カ、トップジンMオイルペーストは成木の胴腐らんの削り取り後のみに使用し、剪定及び枝腐らん剪去後の切口には使用しない（薬害防止）。

キ、発芽前に石灰硫黄合剤、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤のいずれかを散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. モニリア病 (葉ぐされ)	県北部：やや早い（－） 県中央部・県南部： やや早い（－）	県北部：やや少ない（前年よりやや少ない） 県中央部・県南部：やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。

イ、3月22日現在、ふじの予測発芽日はかづの果樹センター（鹿角市）では4月13日（平年差＋2日）、果樹試験場（横手市）では4月4日（平年差－1日）である（±/ ）。

ウ、前年の実ぐされ発病果そう率は県北部では0%（平年0.2%）、県中央部・県南部では0%（平年0.0%）でいずれもやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ひこばえは伝染源となるので剪去する。

イ、葉ぐされは見つけ次第摘み取り、焼却するか土中に埋める。

ウ、例年、発病の見られる園地では、展葉期頃に保護防除剤としてストライド顆粒水和剤、デランフロアブル、パスポート顆粒水和剤、ベフラン液剤25、治療防除剤としてSDHI剤（RACコード：7）（カナメフロアブル等）のいずれかを散布する。

エ、発病が少ない場合は、治療防除剤として開花直前にDMI剤（RACコード：3）（アンピルフロアブル等）、SDHI剤（RACコード：7）（カナメフロアブル等）のいずれかを散布する。

オ、発病が多い場合は、葉ぐされ発生盛期（開花1週間前～開花直前）に治療防除剤としてトップジンM水和剤を散布する。なお、展着剤としてニーズを加用すると高い効果が得られる。

病虫害名	予報内容	
	感染時期	感染量
3. 黒星病	県北部：やや早い（－） 県中央部・県南部： やや早い（－）	県北部：やや少ない（－） 県中央部・県南部： やや少ない（－）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。

イ、3月22日現在、ふじの予測発芽日はかづの果樹センター（鹿角市）では4月13日（平年差＋2日）、果樹試験場（横手市）では4月4日（平年差－1日）である（±/ ）。

ウ、前年9月の新梢発病率は県北部では3.5%（平年9.7%）、県中央部・県南部では0%（平年0.0%）でいずれもやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、展葉期の防除は芽出し10日後を目安に、ベフラン液剤25を散布する。りんごの生育状況は、果樹試験場のウェブサイト (<https://www.pref.akita.lg.jp/kaju/>) を参考にする。

イ、展葉10日後の散布薬剤はパスポート顆粒水和剤を散布する。

ウ、開花直前と落花直後の薬剤は過去2年間の発生状況に応じて以下のとおり選択する。

① 過去2年間に発生がなかった園地では、開花直前と落花直後にDMI剤（RACコード：3）（オンリーワンフロアブル、アンビルフロアブル等）が使用できる。DMI剤を使用する場合は、耐性菌出現を回避するため、使用回数は年2回以内とし、必ず保護殺菌剤（チオノックフロアブル、ジマンダイセン水和剤等）を加用するか、これらの混合剤を使用する。

② 過去2年間に発生があった園地では、開花直前にSDHI剤（RACコード：7）（カナメフロアブル等）、落花直後にユニックス顆粒水和剤47又はミギワ20フロアブルを選択する。耐性菌の出現を回避するため、これらの薬剤を使用する際は必ず保護殺菌剤（チオノックフロアブル、ジマンダイセン水和剤等）を加用する。

エ、開花期前後の散布間隔は10日以内とし、散布予定日に降雨が予想される場合は降雨前に散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. リンゴハダニ	—	平年並（—）

(1) 予報の根拠

ア、3月1～2半旬の巡回調査における越冬卵の発生短果枝率は0%（平年0%）、発生地点率は0%（平年0%）でいずれも平年並だった（ /± ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、芽出し前に防除ができなかった場合は、芽出し10日後までにスプレーオイル、トモノールS、ハーベストオイルのいずれかを100倍液で散布するが、前年に発生がなく越冬卵も確認されなかった園地では省略してもよい。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
5. ハマキムシ類	やや早い（—）	平年並（—）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（—/ ）。

イ、3月22日現在、ふじの予測発芽日はかづの果樹センター（鹿角市）では4月13日（平年差+2日）、果樹試験場（横手市）では4月4日（平年差-1日）である（±/ ）。

ウ、前年9月の被害新梢率は0%（平年0%）で平年並だった（ /± ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、開花直前又は落花直後にIGR剤（RACコード：15又は18）、BT剤（RACコード：11A）、ジアミド系剤（RACコード：28）のいずれかを散布する。

イ、訪花昆虫保護のため、開花1週間前～落花直後は、ア、以外の殺虫剤は散布しない。

C なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1. 黒星病	平年並（－）	やや少ない（－）

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。

イ、3月22日現在、果樹試験場（潟上市）における幸水の予測発芽日は4月13日（平年差＋6日）である（+ / ）。

ウ、前年9月中旬の新梢葉の発病葉率はやや低かった（ /－）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、なしの生育状況は、果樹試験場のウェブサイト (<https://www.pref.akita.lg.jp/kaju/>) を参考にする。

イ、落葉は一次伝染源となるので、園内に残っている場合は、発芽前までに集めて土中深く埋めるなど適切に処理する。

ウ、芽りん片から芽基部への感染防止のため、発芽直前にアルタベールフロアブル60倍又は石灰硫黄合剤10倍液を散布する。

エ、落葉からの感染防止のため、発芽2週間後にチオノックフロアブル500倍、トレノックスフロアブル500倍、ベルコート水和剤1,000倍液のいずれかを散布する。SDHI剤（RACコード：7）（カナメフロアブル、ネクスターフロアブル、フルーツセイバー）を使用する場合は、年間の総使用回数は2回以内とし、保護殺菌剤（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル、ベルコート水和剤等）を加用する。

オ、前年に黒星病の発生した園地では、開花直前のDMI剤（RACコード：3）はスコア顆粒水和剤を2,000倍で使用する。

カ、農薬の総使用回数は、前年の収穫後からカウントされるので、秋期防除実施園では注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. リンゴハダニ	－	平年並（－）

（1）予報の根拠

ア、3月上旬の巡回調査における越冬卵の発生短果枝率は0%（平年0.06%）、発生地点率は0%（平年0.9%）でいずれも平年並だった（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、前年秋期に発生が見られた園地や越冬卵が見られる園地では、発芽前にアルタベールフロアブル40倍又はハーベストオイル50倍液を散布する。

D ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1. 黒とう病	やや早い (－)	平年並 (－)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されていることから、ぶどうの生態は早いと見込まれる(－/)。

イ、前年7月の発生量は平年並であった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、伝染源となる前年の被害枝(結果母枝)や巻きひげは切り取って処分する。

イ、薬剤を散布する場合は、かけむらの無いように十分量を散布する。

ウ、前年に発生が見られた園地では、発芽前にデランフロアブル200倍、パスポート顆粒水和剤250倍、ベフラン液剤25 250倍、ベンレート水和剤200倍、ベンレートT水和剤20 200倍液のいずれかを散布する。

エ、シャインマスカットなどの欧州系品種やスチューベンは発生が多いので、休眠期の防除を徹底する。特に、若木は新梢の被害が大きくなりやすいので注意する。

IV. 気象予報

令和4年3月24日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報(3月26日～4月25日)

(1) 予報のポイント

- ・ 1週目は気温がかなり高くなる可能性があります。
- ・ 向こう1か月の気温は暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。
- ・ 向こう1か月の降水量、日照時間はほぼ平年並の見込みです。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(東北日本海側)

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	10%	30%	60%
降 水 量	40%	30%	30%
日 照 時 間	30%	30%	40%

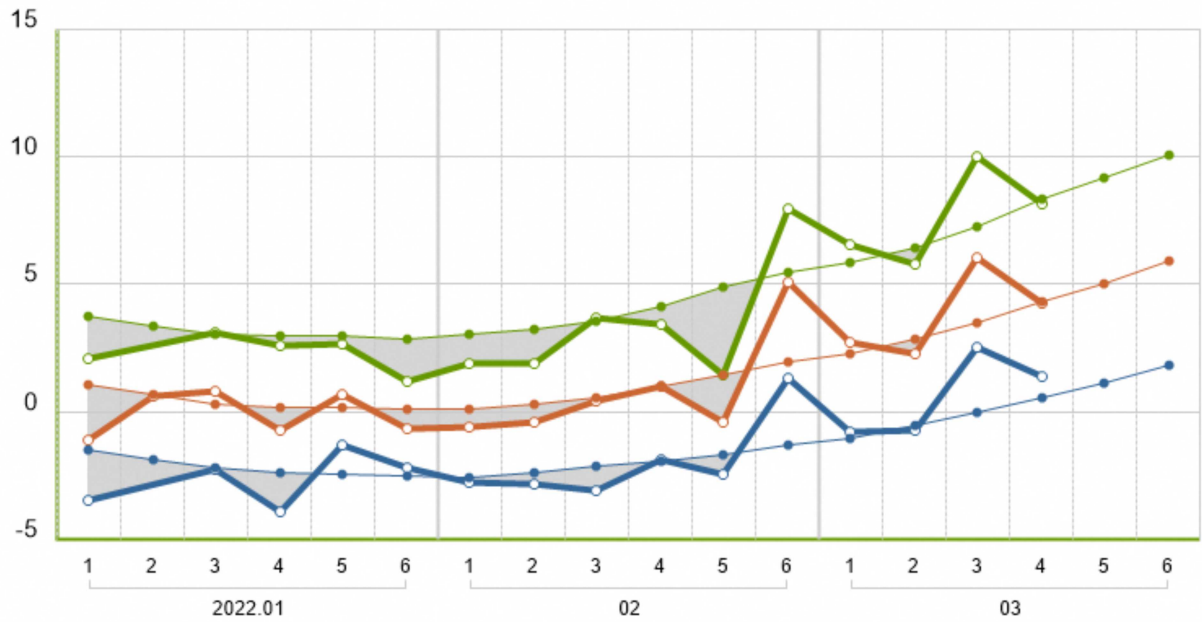
(3) 気温経過の各階級の確率(東北日本海側)

	低い	平年並	高い
3/26～4/1(1週目)	10%	10%	80%
4/2～4/8(2週目)	20%	40%	40%
4/9～4/22(3～4週目)	20%	30%	50%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～3月4半旬 秋田県農業気象システムより)

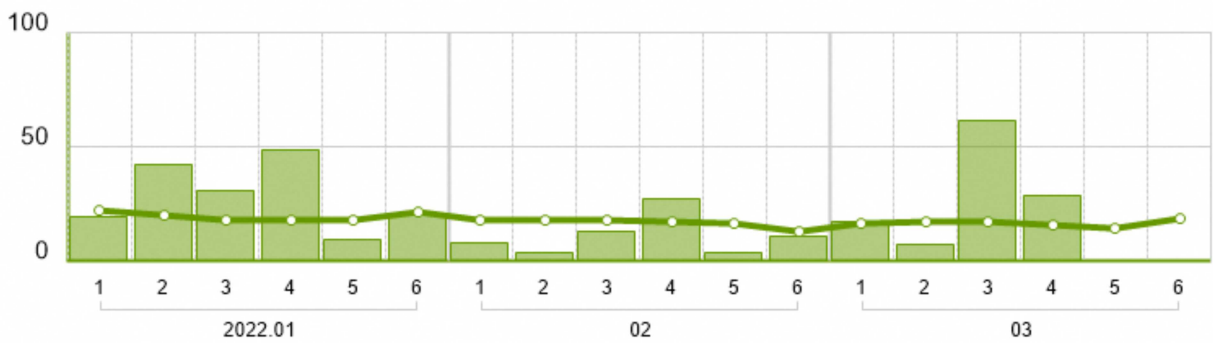
気温℃

○ 平均気温 ○ 最高気温 ○ 最低気温
 ○ 平均気温平年値 ○ 最高気温平年値 ○ 最低気温平年値



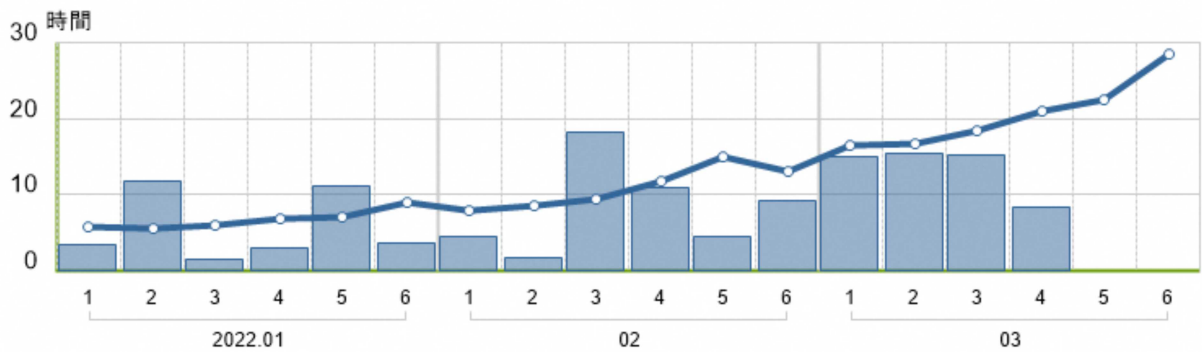
降水量ミリ

■ 実況値
 ○ 平年値



日照時間

■ 実況値
 ○ 平年値



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

平年値 ↓						
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

水稲育苗終了後に野菜類や花き類を作付けする場合の注意

水稲育苗終了後に野菜類や花き類を作付けする場合は、育苗箱の下に不透水性無孔シートを敷いて、育苗期に施用した農薬をハウス内土壌に浸透させないようにしてください。

薬剤を移植前～移植当日に処理する場合は、育苗施設外で使用してください。

詳細は、令和4年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準を参照してください。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分な注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

- 安全使用の基本事項
 - ・ 農薬の使用基準を遵守する。
 - ・ 病害虫の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
 - ・ 防除履歴を必ず記録する。
- 農薬使用上の注意
 - ・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させないようにする。
 - ・ 家畜や蜜蜂などに影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類などを散布前に確実に周知する。
 - ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
 - ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
 - ・ 農薬散布作業にあたっては、装備と体調を万全にする。
- 農薬取扱い上の注意
 - ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
 - ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水の容器など）へ移し替えない。